

## 関係発達臨床からみた共同注意

小林 隆 児\*

**Abstract :** The objective of this paper is to discuss joint attention from the clinical standpoint of relational development. Starting with review of the language-cognitive deficit theory and problems inherent to the "theory of mind" deficit theory heretofore propounded as the primary deficits of autism, the indispensable nature of the relational perspective in considering the issue of development is discussed. To this end, the need to reexamine the reason why relations between autistic children and their caregivers are difficult to start with is described. In such relationships, the child's ambivalence regarding drive of relation gives rise to disturbance in relationship with the caregiver, and motivational conflict behavior on the part of the child. This also precipitates attention deficit, which is believed to be a principal factor in the difficulty of establishing relationships conducive to joint attention. To illustrate this perspective, the formative process of joint attention is examined through actual cases depicting transformation in the parent-child relationship.

Jpn. J. Med. Psychol. Study Infants, 17 (1): 49-59, 2008

**Key words :** ambivalence, joint attention, motivational conflict behavior, relational development, relationship disturbance

### はじめに

本稿では主に自閉症をはじめとする対人関係の成立に困難をもつ乳幼児期の子どもたちとその養育者を対象としてこれまで取り組んできた

関係発達臨床の立場から (小林ら, 2005), 共同注意がなぜ親子に成立しがたいのかを論じるとともに, 関係発達支援の中で認められた親子関係の変容過程を通して共同注意がどのように成立していくのか, 具体的な事例を取り上げながら考えてみたい。

Joint attention from the clinical standpoint of relational development

\* 大正大学人間学部臨床心理学科

(〒170-8470 東京都豊島区西巣鴨 3-20-1)

Ryuji Kobayashi: Department of Clinical Psychology, Faculty of Human Sciences, Taisho University 3-20-1, Nishisugamo, Toshima-ku, Tokyo, 170-8470, Japan

### 自閉症の基本障 碍をめぐって

#### 1. 言語認知障 碍仮説

これまで自閉症の基本障 碍について, 幾多の仮説が登場しては消えていった。その代表的なもののひとつが言語認知障 碍仮説 (Rutter ら,

1971)であった。筆者の知る限り、この言語認知障害仮説について真正面から問題点を取り上げて論じたものはさほど多くはないが(小澤, 1984, 滝川, 2001), 筆者も数年前に小書で論じたことがある(小林, 2004)。そこで論じた要点は以下の通りである。

対象のもつ意味は、客観的、中立的に決められているのではない。主体が対象にどのように関わるか、何にどのように着目するか、そのような主体のあり方によって初めて、その対象のもつ意味は規定される。つまり対象や事象のもつ意味は、主体のそれらへの関心のあり方そのものに大きく依っている。したがって、われわれが(その時の)対象の意味を一方向的に規定し、それを子どもに押し付けるわけにはいかない。つまりは、子どもの主体性を抜きに(その子どもにとっての)対象の意味を付与することはできない。

ことばの成り立ちを考えてみると、対象とことばの関係は一対一対応にはなく、本来対象のもつ意味は多様性を持つ。とするならば、子どもに眼前の対象のもつ意味を教える際に、われわれの立場(視点)によってそれを規定することはできない。子どもがその対象に「いま、ここで」いかに関わっているのか、つまりはその対象のどのような側面(属性)に興味、関心をもって関わっているのか、そのことを踏まえずして子どもに「いま、ここで」その対象のもつ意味を提示することは原理的に不可能である。したがって、子どもにことばを教える際には、子どもの側の関心のあり方、つまりは子どもの主体性を一義的に考えることがなにより大切になる。このように考えていくと、子どもが発する一見意味不明なことば(あるいは発声)であっても、その時の子どもの主体性に着目するならば、自ずからそのことばの意味がそこで関わっているわれわれと子どもとの間に立ち上がってくる。したがって、自閉症の子どもにことばをかける際には、子どもの主観 subject あるいは

主体 subject を尊重した関係づくりがまずもって大切になる(小林, 2005)。

「共同注意」で示される関係のありようは、まさにここでいうところの子ども(あるいはわれわれ)の対象に向ける注意や関心をわれわれ(あるいは子ども)と共有する営みを意味していることから、本来の生きたことばの獲得のために不可欠なものであることがわかる。

このように考えていくと、これまでの客観性を重視するあまり言語(認知)機能に強く依存してきた研究方法によって問題の核心に迫ることは困難である。自閉症の言語認知の問題はその言語認知機能の獲得過程そのものに内在しているのではないかと推測されるのである。

よって、自閉症の言語認知の問題に接近するためには、主体の主観(気持ち、動機、意図など)、間主観にまで分け入ることが不可欠である。言語認知障害仮説は言語認知機能の獲得過程の内実を一切捨象したところに成立していたのではないかと考えられるのである。

## 2. 「心の理論」障害仮説

その後いつの間にか言語認知障害仮説は下火になり、次いで登場したのが「心の理論」障害仮説(Baron-Cohenら, 1988)であった。この仮説にとりわけ大きな関心を示したのが発達心理学領域の研究者であったようにみえる。「心の理論」(Premackら, 1978)が動物を対象とした研究から登場したことから、動物行動学者と発達心理学者は強い関心を示し、多くの論考が今日まで登場している。

この仮説をめぐる筆者が抱いてきた疑問は以下の点である。

第一に、Baron-Cohenらが提唱した「心の理論」障害仮説の中心をなす実験パラダイムは「サリーとアン」課題であるが、この種の実験課題に共通していることは、被験者に話しことばを用いて課題が提示されていることである。当然そこではことばの共通理解が前提となって

いるが、先に述べたように、自閉症の言語認知障害の本質は、言語認知機能の獲得過程そのものにあることを考えると、われわれ共通の文化の産物であることばを用いて課題を提示すること自体が、問題の本質からはずれた接近方法ではないかという疑問である。自閉症の子どもたちがこの種の課題提示を知的に理解することに困難を示すことが多いことは確かであるとしても、その結果のみから自閉症児が他者の心を理解できないと即断することはできないのではないかということである。

第二に、自閉症（に限らず）の子どもたちはわれわれのこころのありようと（肯定的にも、否定的にも）深くつながりながら生きていることの現実をまったく考慮にいれていないことである。ことばがまだ獲得されていない自閉症の子どもたちと養育者との関係の機微を詳細に観察すると、いかに彼らが場の雰囲気や養育者（あるいはわれわれ）のこころ（気持ち）の動きに敏感に反応しているかに気付かされ、驚かされる（小林, 2007; 小林ら, 2008）。彼らは原初的知覚に強く依拠しながら、環境世界と関わっているということである。よって、彼らは知的には他者のこころを理解することに困難はあるとしても、身体（情動）水準では、つまり情動的コミュニケーションの世界では、他者のこころのありようを自ら体感しているのである。たとえそれが異常なほどに過敏にはあっても、である。

第三に、「心の理論」障害仮説を立てる際に、「こころ」の成り立ちをどのように考えているかということである。「こころ」の原初のかたちをどのように考えるかという問題である。素朴に考えてみてもわかることだが、乳児は自分の気持ちのありようを知的に理解することはむずかしい。さらに、原初の段階では喜怒哀楽といった気持ちの分化さえも満足にはできていない。しかし、生まれてまもなく、泣き方も次第に分化し、空腹な時と眠い時では泣き方にも違いが表れる。その段階で乳児自身は自分の気持ちを

いまだ理解してはいない（だろう）。そこで養育者は乳児の気持ちつまりは情動の動きを自らの身体で感じ取って相手をする。乳児が今なぜ泣いているのか、何が不快なのか、乳児の気持ちを感じ取りながら応じている。まるで養育者自身が乳児であるかのように、そこで感じ取った気持ち（乳児の気持ち）を投げ返しながら相手をしている。成り込み（鯨岡, 1997）と映し返し（ミラーリング）である。このような関わりの体験の蓄積によって子どもの情動の分化は促進されるとともに、子ども自身も自分の情動の動きの（文化的）意味に気付くようになる。

乳児を含め子どもは、われわれのこのような関わりなくして、共同体としてのこの世界で自分や環境における様々な対象や事象の文化的意味を体得することはできない。われわれ自身が自分の姿を鏡なくして見ることができないことと同じである。子どもにとって彼らを見つめるわれわれの瞳は、我々にとっての鏡と同じような機能を果たしているのである。

「こころ」とは、このような対人交流を日々蓄積している中で、次第に形成されていくものであって、子どもの中に自己完結的に自生してくるような性質のものではない。関係を抜きに「こころ」の問題を考えていくことなど原理的に不可能である。

とするならば、まずもって問題として取り上げる必要があるのは、なぜわれわれは自閉症の子どもたちの情動（気持ち）の動きを感じ取ることが難しいのか、それはどのような関係の問題として捉えることができるか、ということである。もしもわれわれが彼らの情動の動きを容易に感じ取りながら関わるができるならば、彼らの気持ちの分化も進み、彼らのこころも次第に育まれていくのではないか。われわれに彼らの情動の動きを感じ取ることが難しくしているのは何か、その点を追及していくことが必要ではないのか。

しかし、なぜか自閉症研究（に限らないが）においてはこれまで、言語認知障害仮説でも、

「心の理論」障害仮説でも一貫して自閉症の基本障害を子どもの個体側の問題としてとらえ続け、彼らを取り囲む養育者をはじめとする環境要因は捨象されてきた。人間の発達には素質と環境の相互作用の結果であるという自明なことがこれまでなぜかないがしろにされ続けてきたのである。

### 3. 「発達障害」について

さらに問題として改めて考えなければならぬのは、自閉症は「発達障害」であるにもかかわらず「発達」や「障害」をどう考えるか、この点についての検討が不十分なまま「発達障害」や「自閉症」が論じられてきたことである。自閉症とは「発達」の問題であるにもかかわらず、そこでは「発達」についても「障害」についても十分に議論されてこなかったという問題がある。

なぜ「発達障害」なのか、その意味は以下の三点にある（鯨岡、2005a）。

第一には、発達障害にみられる現在の症状（障害）の大半は、過去から現在に至る過程で形成されてきたものだということである。生誕直後（あるいはそれ以前の胎生期を含め）から現在までの時間軸の中で、つまりは発達の過程で生み出されてきたものだと考える必要がある。

第二に、発達障害にみられる症状（障害）は将来にわたって改善したり増悪したりする、つまりは変容していく可能性があるということである。

第三に、発達障害においては、土台が育ってその上に上部が組み立てられるという一般の発達の動きが阻害されているということである。乳幼児期早期に子どもと養育者のあいだでなんらかのボタンの掛け違いが起こり、そこに関わり合うことの難しさ（関係障害）が生まれ、それをもとに対人交流が蓄積されていくことによって、関係障害は拡大再生産され、その結果子どもにも多様な障害がもたらされていくと見なす必要があるということである。

つまりは、発達障害に認められる症状（障害）は、生まれてから今日までの素質と環境の相互作用の蓄積の結果の産物として捉える必要があるということである。

では「発達障害」についてはどうか（鯨岡、2005b）。

一般的に「障害」は、医学モデルに基づき、中枢神経系の機能に起因する（主に生得的、時に後天的）基礎障害（impairment）によって個体能力の正常発現過程が損なわれ、時間経過の中で心身両面に様々な正常からの偏奇ないし能力障害（disorder/disability）が出現するものと考えられている。

自閉症においても同様に、何らかの中枢神経系の機能の問題に起因する基礎障害（impairment）が想定され、生誕後の発達過程の早期の段階で、診断基準の三大行動特徴（対人関係の質的障害、コミュニケーションの質的障害、行動や興味の限局化）（disorder/disability）が出現するという。さらに、自閉症ではとりわけ学童期から思春期にかけて多彩な行動面や精神面の障害や症状を呈することが多いが、これらは二次障害と称され、その後の成長過程で環境要因が深く関与して形成されたものと見なされている。

以上のように通常、障害は基礎障害（impairment）と、一次障害ないし特異的障害（診断を特定化する上での重要な障害）（disorder/disability）、そして二次障害の三つに分けて考えられているが、実はこれら三者がどのような関係にあるのかいまだ判然としないのである。それはなぜかといえば、基礎障害（impairment）を仮定するにしろ、一人の子どもが生まれた後の成長過程は子ども独自の自己完結的な営みではないことは自明のことである。そこには身近な養育者を初めとする多くの人々との関わり合いがあり、その結果、子どもの発達が保障される。したがって、基礎障害（impairment）と深く関連づけられている一次障害ないし能力障害（disorder/disability）の多

くも養育者などとの深い関わり合いの中で生み出されてきたものとみなさなければならないであろう。とするならば、一次障害ないし能力障害 (disorder/disability) も二次障害と同様に、個体と環境との相互作用の結果の産物として理解する必要があるのではないかということである (小林, 2008)。

#### 4. 「共同注意」 障害仮説

さらに同じ頃、登場したのが本稿のテーマである「共同注意」 障害仮説である (Mundyら, 1989)。われわれがある対象に向かって指差し、それに対して子どもがその対象に関心を向け、そこでわれわれがその対象のもつ意味を語る。このような三項関係が容易には成立しないというところに、自閉症の基本障害を想定するのが「共同注意」 障害仮説である。メタ表象の認知機能の獲得 (つまりは「心の理論」の獲得) 以前に出現する共同注意技能に自閉症では障害が認められる。共同注意の問題がより基本の障害だというわけである。

この仮説は、これまでの言語認知障害仮説や心の理論障害仮説と比較すると、「共同注意」とあるように、関係を示唆する視点が感じられるところがこれまでの仮説と異なるところかもしれない。しかし、自閉症の基本障害としての「共同注意」 障害仮説の提起もやはり基本的に個体能力障害の枠組みを抜け出していないように筆者にはみえる。

これまでの議論から浮かび上がってくるのは、自閉症の基本障害をめぐる問題の立て方そのものに対する疑問である。

そもそも発達現象とは、土台が育ち、それに積み重ねるようにして展開していくものであることを考えると、「共同注意」の問題を追求していけば、自ずとその前段階の問題を取り上げる必要が出てくる。基本障害は何かという問題追求を続けていけば、際限なくつきなる疑問が生じてくることになる。臨床には関与せず研究

一筋で生きる者にとってはそれでも探究心を満たしてくれるかもしれないが、われわれ日々発達に問題を抱えた子どもとその家族に接しながら研究の道を探っていく立場の者にとっては、より現実的な方法が求められるのではないか。基本障害を追求するという問題の立て方が、発達というきわめて複雑な要因が日々錯綜する現象に対して果たして有効な手だてか否か、今一度立ち止って考えてみる必要があるのではないか。

生誕後、素質と環境が不断に交流しながら展開していくということに発達の本質があることを考えると、自閉症の問題に取り組むにあたって、まずもって対人関係そのものがなぜ成立困難なのか、再度原点に戻って対人関係の質的検討を行う必要があるのではないか (小林, 2007)。そして、そこで把握された関係の問題 (関係障害) に対して支援を重ねながら、関係の変容過程を通して、こころの育ちを検討していくことがもっとも現実的で、実践的な営みではないかと思われるのである。

### 関係障害の内実から 捉えられた注意の問題

#### 1. 新奇場面法からみた注意の問題

筆者は関係の問題の性質を探る目的で愛着パターンの評価に世界的に用いられている新奇場面法 (Strange Situation Procedure; SSP) (Ainsworthら, 1978) を関係評価のひとつの枠組みとして実施している。

ただし、ここで注意を喚起したいのは、これまでの愛着研究の多くは、愛着 attachment の語義に示されているように、子どもが養育者に接近し密着するという行動次元での観察に力点を置いていることである。子どもが養育者に向ける愛着行動の特性のみを取り上げて愛着パターンとして評価するという問題である。養育者に対して子どもにどのような気持ちが生まれ、行動が誘発されるかを考えるとともに、当然子どもの相手をしている養育者にも様々な気持ち

が喚起され、行動が誘発されるはずである。そしてそのことが子どもにも影響を及ぼしているはずである。そこでは子どもと養育者との間に複雑な気持ちの動きが派生するとともに、両者に様々な行動が誘発されている。つまりは、子どもの愛着にまつわる問題も「関係」という視点が不可欠だということである。それにもかかわらず、愛着研究でも、子どもの愛着にまつわる行動に力点がおかれ、養育者の養育行動は取り上げられたとしても両者の「関係」、とりわけ「いま、ここで」の関係のありようそのものに踏み込んではいないように思われる。

筆者は関係障害を呈した多くの事例に SSP を実施する中で、子どもと養育者の関係のありようがいかに繊細で微妙なこころの動きを伴って展開しているかを教えられてきた（小林，2007）。

自閉症あるいはそのリスクをもつ子どもにおける「注意」の問題は SSP では次のような形で顕在化することが多い。具体例を取り上げてみよう（小林，2005）。

事例 Y 子 初診時1歳9ヵ月 自閉症

<主訴>

視線が合いにくい、呼びかけに反応しない、喃語のような発声ばかりで有意語はない、ひとり言のようにぶつぶつつぶやく、気移りがはげしい

<知的発達水準>

DQ 70（津守式精神発達検査）

<生育歴>（省略）

<SSP での特徴>

母子二人で自由に遊んでいる時は、母親の働きかけには目立った反応は乏しく、母親に背を向けながらひとりで遊ぶことが多い。母親もどうしてよいか途方に暮れて手も足もでない状態にあった。その後、ストレンジャー（ST）が入室すると、ST に対して強い警戒的な態度をとっていた。

しかし、1 回目の母子分離の際、母が退室す

るとすぐに気づいたが、ボールテントの中に入ったままボールを扱うこともやめ、急にまったく声も出さなくなり、じっと周囲の様子をうかがうようにして身を硬くした状態がしばらく続いた。母との直接的な関わりは避けながらも、いざ母親が目の前から姿を消すと、明らかに不安と緊張が高まる様子であった。

3 分後の 1 回目の母子再会で、母が入室してくると自分のそばに来るまで母の方をじっと見ていたが、いざ母が目の前に来ると視線を反らし、まるで吸い寄せられるように、Y 子の注意は退室する ST の方に移してしまった。ソフトブロックで遊んでいた Y 子の正面に母が座って手を貸そうとすると、Y 子は母を回避するようにその場から離れてソフトブロックが入れてあるカゴのほうへ移動してしまっただけで、母も Y 子にどう関わったらよいかわからない様子で、その場に座ったまま Y 子を遠くから眺めていた。

Y 子が母親の不在に対して心細くなり、周囲に強い警戒的な構えを見せていたにもかかわらず、いざ母親と再会し母親と身体が触れ合うほどの至近距離になると、ほとんど反射的（自動的）に視線は母親から ST の方に逸れてしまっている。このような視線回避の反応を引き起こしている最大の動因は「関係欲求をめぐるアンビバレンス」と筆者は考えているが、関係欲求という養育者に向ける気持のありようが、こうした視線回避行動を誘発している。さらにはいうならば、このアンビバレンスによって愛着関係は深まらず、安心感が育まれない。その結果、常に心細い心的状態にあって、視線のもつ力動感 vitality affects が Y 子にとっていたく侵入的に映るため、思わず視線回避が起こっていると思われるのである。

## 2. 関係の変容過程で認められる注意の問題

この視線回避の問題は、支援初期段階の SSP でのみ観察されるのではなく、支援の過

程で <子ども一養育者> 関係がかなり改善してきた段階においても突然生じてくることが稀ではない。Y 子の場合は以下のようなエピソードとして現出した。

初回から Y 子は Mother-Infant Unit (MIU) にあったビニールの大きなフープに興味を示し、母親に床に立てて回すように要求するようになった。第 3 回、フープを目にすると、自分から要求して母にフープを回してもらった。しかし、それに夢中になることはなく、フープの先の遠くにあったおもちゃ箱の中のミニチュアの哺乳瓶が目に入ったのか、突然それを取りに行ったため、それまでの母子二人の遊びは途切れてしまった。

さらに、Y 子は母にお手玉のようにしてボールをポーン、ポーンと投げてもらい、それを見て嬉しそうにしていたが、突然上がったボールに合わせて上を向いた拍子に、天井のカメラが目に入ったのか、それに目を奪われてしまい、じっとカメラに見入ってしまった。唐突に注意が逸れるために、一緒につき合っているわれわれも楽しい気分が持続せず、そのたびにどこか寂しい思いを味わうのであった。

われわれは Y 子のセッションを重ねていくうちに、一緒に遊んでいる最中にも、このような周囲の刺激に容易に動かされやすい傾向を頻回に認めた。この種のエピソードが示しているのは、彼らの注意が周囲の刺激に容易に動かされるということである。

ここで重要なところは、この種の行動（注意転導）が当事者の意図的なものではなく、新奇刺激に思わず引き寄せられるように、非意図的に現出したものであるということである。筆者はこのような行動を接近・回避動因的葛藤行動 (Richer, 1993) として位置づけているが、その背景にはいまだ残存している「関係欲求をめぐるアンビバレンス」、すなわち情動の問題が深く関与していることが推測されるのである。

この注意の問題は、本能的、自動的水準、つまりは情動的コミュニケーション水準での反応であることが重要なところである。

なぜならば、「関係欲求をめぐるアンビバレンス」が緩和し、<子ども一養育者> 関係がしっかりと安定したものになっていくにつれ、このような注意の問題は目立たなくなることを幾多となく経験してきたからである。ただし、先ほど述べたように、情動と注意の問題はより生物学的要因の強いものであるためか、かなり長期的に持続しやすいという傾向は否めない。

この注意転導の現象が起こる背景には、遊びで快の興奮が生じたとしても、十全な情動興奮をもたらすまでに至りにくいことが推測される。したがって、彼らに対する関係支援では、筆者は彼らの情動（正負ともに）が十全に機能するようになることを目指すことに力点を置いている。喜怒哀楽がのびのびと表出されるようになることを大切にしているということである。

彼らは関係欲求に限らず本能欲求全般にわたってアンビバレンスが強い。そのため、彼らは本能欲求に基づく行動さえ円滑にとることができにくい。恐らく彼らにとっての主体性の問題の起源には、このような本能次元の問題があるのではないかと思われるのである。そのように考えると、彼らの主体性をはぐくむという発達支援がいかに大変な営みかが想像できるであろう。

### 3. 関係発達支援の基本にあるもの

このようなアンビバレンスの強い子どもたちと日々関わり合う養育者には、どのように関わったらよいかという非常に強い困惑と不安がある。そのことがさらに両者の関係に負の循環を生むことになる。それゆえ、いかにしてこのアンビバレンスを緩和するかということが臨床の初期の要となる。つまりはいかにして両者に生まれた関係の悪循環を断ち切るかということである。そのための最大のポイントは、それまでの過剰なまでに積極的な働きかけを可能な限り控え、子ども自身の関心の向かうところを丁寧に受け

止めることである。それまでの養育者の積極的な構えの持つ力動感 vitality affects は子どもにとっていたく侵入的に映っていると思われるからである。

しかし、ここで心に留めておかねばならないのは、養育者のこのような関与も、子どもが自分を積極的に押し出さないという自閉症の基本にある問題と深く関係しているのであって、数十年前の環境因論でさかんに言われた「養育者の育て方」といった表層的で短絡的な問題の立て方とはまったく異なったものであるということである。

このような対応が功を奏すると、子どもの関係欲求が前面に現れやすくなって来る。その結果、子どもの気持ちの動きを養育者は掴みやすくなる。養育者は子どもの気持ちを受け止めやすくなる。それは養育者の不安の軽減をもたらす。このようにして両者の関係に好循環が生まれる端緒が切り開かれる。その中で子どもに少しずつ安心感が育まれていくようになると、子どもは外界に対して好奇心を持ち始め、積極的に外界との関係を持ち始めるようになる。

子どものそうした肯定的な姿は養育者の喜びとなり、養育者の前向きな育児姿勢を強めて、子どもとの間で何かを共有しよう、子どもの気持ちに添おうという姿が増えてくる。こうして好循環が本格的に巡り始めるが、その中で、関係欲求の高まりとの関連で、子どもの側に様々な表現意欲が湧いてくる。

共同注意という現象はこのような関係の変容過程で必然的に生まれてくると思われるのである。

次にそのことを教えられた具体的な1例を紹介することにしよう（小林ら、2006；小林，印刷中）。4歳0ヵ月時に初めて出会い、以来数年間MIUでの臨床的関わりが続いた事例である。この事例についてはこれまで幾度となく論文や著書の中で取り上げているが、本稿の主題である「共同注意」を考えるにあたって、いろいろと考えさせてくれると思われたのでこ

で再度取り上げてみる。

## 親子の関係発達支援と共同注意

### 1. 事例提示と SSP

拓太 初診時4歳0ヵ月 男児

<知的発達水準> 正常

<臨床診断> 自閉症

<主訴>

ことばの遅れ、視線回避、会話が一方通行、オウム返し、独語、偏った好み。

<発達歴> (省略)

<SSPで認められた母子の関わり合いの特徴>

SSP開始前の説明時、母親は自分が不在になっても拓太は何の反応もしないだろうと予測していたが、実はそうではなく、拓太は後追いをしたり、泣いたりしないだけであった。母親の不在に対して情動面の激しい混乱を示し、ついには不随意運動と思われるような奇妙な反応（チック様発声、前腕のけいれん様運動）を見せている。さらにはひとりてつぶやくようにして空を見つめている。一見すると奇妙な印象を受けるが、近くで見ていると非常に痛々しい感じのする反応である。母親の熱心な拓太への働きかけには回避的な態度を示しながらも、いざ母親が不在になると、明らかに不安が高まっている。しかし、母親を求めるような直接的行動を取ることはできない。非常に強い動因的葛藤が認められ、ついには葛藤行動としての不随意運動を思わせる反応が生じていた。

関係発達支援開始時のこのような関係障壁に対して、われわれは先に述べたような基本方針に基づき、根気強く支援を続けていった。その後、紆余曲折を経て、幼児期後期に親子関係も良好になってきた頃、次のようなエピソードを母親が手記に述べている。

### 2. 忘れられないエピソード——母親の手記より

この頃の私にとってどうしても忘れられないエピソードがある。



拓太は5歳2ヵ月。MIUに通り始めて1年数ヶ月経った2月のある寒い日のことだった。午後からパラパラと雪が降ってきた。

そんなとっても寒い日は、拓太とお家でゴロゴロ過ごす。居間の大きな扉の窓に頭をくっつけて仰向けになった私は、自分の方へ向かってくる雪を下から見ながら拓太に「こうやって見ると面白いよ!」と教えた。「すごいね〜、沢山落ちてくるね〜。」って。拓太も「ワァ〜!」という感じで、二人しばらくそれを見入っていた。

次の日も窓を開けると雪が降っていた。今度は拓太から仰向けに寝て、昨日と同じ見方で雪を見ていた。しばらくして私を引っ張り、<同じことしろ、一緒に見ようよ>という感じで誘ってくれた。

こういう時のゆっくり流れる時間を過ごしていると、その時の雰囲気、空気がホワンとしていて、お互い穏やかな気持ちになり、言葉なんていらぬ。一つのことを見て、一緒に感じていられることが嬉しかった。

ここに描かれている親子の関わり合いは、「共同注意」で示される関係のありようそのものといってもよいとても感動的な内容である。

### 3. 関係発達支援の経過の中で浮かび上がってきたこと

第1に浮かび上がってきたことは、われわれがまず目指すのは子どもの側の「関係欲求をめぐるアンビバレンス」の緩和だとはいっても、このアンビバレンス自体もけって子どもの側だけの問題で生れるという単純なものではないということである。

養育者は意識的には積極的関与を控えているつもりであっても実際の関わり合いの中ではさほど容易に円滑に好ましい方向に変わっていくものではない。それはなぜかといえば、養育者の行動を規定している前意識水準の問題が関与していることが少なくないからである。われわ

れ誰でも子育てに従事する際に、子どもに少しでも早く、元気に成長してもらいたいと願うものである。そのような思い(こうあってほしいという子どもに抱く理想の姿)が「遣えば立て、立てば歩めの親心」を形作っているが、こうした思いは普段意識することはなくても養育行動におのずから反映されている。このような前意識水準の価値観と思いが養育者の子どもへの関わりにいろいろと反映するからである(Lebovici, 1983)。

この事例では、母親自身が子ども時代に自分の母親による被養育体験を通して、とても立派で努力家であった母親の期待に応えることで褒められることの喜びを実感してきた。このことが自ら母親になった時、周囲からよくやっている親として認められることを目指す熱心な養育者としての行動へ駆り立てていたことが次第に浮かび上がってきたことである。このことは通常肯定的に評価されることはあっても否定的に取り上げられることではないかもしれないが、関係をもちにくい子どもとの関わり合いにおいては、子どもの能動性を育む上でこのような関与が時に阻害的要因として機能してしまう。ここにも関係の問題として考えていくことの重要性が指摘されるのである。

第2に、先の母親の一時的混乱を救ったのが父親の存在であったということである。MIUでの支援開始当初は、父親のきこちなく唐突な子どもへの関わりは、当時の子どもにとっては強引に誘い込まれてしまうほどの強い負の刺激となっていたが、次第に子どもが外界への好奇心を抱き始め、遊びの広がりをも求め始めた段階になると、それまでのきこちなない父親の動きも落ち着きを取り戻すとともに、父親がさりげなく目の前で展開してくれる新奇な遊びが子どもの好奇心をいたく刺激し、父子ともになって生き生きと遊びは広がっていくようになった。このようにして家族全体の機能が修復されていったのである。

第3に、先に述べた共同注意に示されるよう

な関係のありようは、第1に取り上げた母親の気づきによってあまりに積極的な関与が影を潜めていったことによって初めて生れてきたことである。

そして、このような関係が生れたことと時期を同じくして、子どもが母親に寄せる関係欲求を直接的に強く表に現すことができるようになっていく。これまでもすでにアンビバレンスが多少なりとも緩和していくことによって、母子間の愛着形成は一定の深まりを示していたことが、母子の注意関心を共有し喜びを分かち合う関係を生んだことは確かであろうが、次第に母親がゆとりを取り戻したことがより一層両者の関係を確かなものにし、子どもは関係欲求をより強く前面に押し出すことができるようになり、母親もそれをより自然に受け止めることができるようになっていったのである。

#### おわりに

以上、関係発達支援の経過の中で浮かび上がった主要な点を考えていくと、われわれが自閉症の子どもたちの情動（気持ち）の動きを感じ取ることが難しいのは、子どもの側に強いアンビバレンスが生れているからであるが、そのため養育者（われわれ）との関係は必然的に負の循環をもたらすことになる。それをわれわれは関係障害として捉えて支援のあり方を志向している。

「共同注意」で示される関係のありようは、この関係障害に対する介入とその後の紆余曲折を伴った根気強い関係発達支援によってやっと生れてきたことがわかる。

改めて痛感するのは、われわれの生きる共同世界の文化を子どもに伝えるという養育行動は、子どもといういまだ文化を身にまっていない立場の者を変えていくことではなく、養育者をはじめとするわれわれ自身のこころのありようそのものに目を向けながら、子どものこころの動きに沿った丁寧な養育的関わりが求められているということである。

素質と環境の不断の相互作用としての現象である発達という問題を考える際には、何か特定の原因探しをするのではなく、あくまで「いま、ここに」立ち現れている子どもとわれわれとの関係そのものをしっかり丁寧に捉えることから出発することがぜひとも必要ではないか。われわれ自身のこころのありようを抜きにして発達の問題を捉えることは原理的にありえない。なぜなら、ヒトは「関係」を通してしか人になりえないからである。

なお、本稿後半で取り上げた事例に対する関係発達支援の詳細については小林（印刷中）を参照されたい。

#### 引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E. et al. (1978). *Patterns of Attachment: A Psychological Study of the Strange Situation*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Baron-Cohen, S., Leslie, A. M. & Frith, U. (1988). Does the Autistic Child Have a "Theory of Mind"? *Cognition*, 21, 37-46.
- 小林隆児 (2004). 自閉症とことばの成り立ち—関係発達臨床からみた原初的コミュニケーションの世界—. 京都, ミネルヴァ書房.
- 小林隆児 (2005). 主体性をはぐくむことの困難さと大切さ—幼児期と青年期をつなぐもの—. *そだちの科学*, 5, 35-41.
- 小林隆児 (2007). ストレンジ・シチュエーション法からみた幼児期自閉症の対人関係障害と関係発達支援. 数井みゆき, 遠藤利彦 (編), *アタッチメントと臨床領域*, pp. 166-185. 京都, ミネルヴァ書房.
- 小林隆児 (印刷中). 自閉症とこころの発達—親と子の関係発達支援—. 東京, 岩崎学術出版社.
- 小林隆児, 原田理歩 (2008). 自閉症とこころの臨床—行動の「障害」から行動による「表現」へ—. 東京, 岩崎学術出版社.
- 小林隆児, 勝又基与美 (2006). 関係発達臨床の立場から—ある高機能自閉症の子どもをもつ母親の手記より—. *そだちの科学*, 7, 30-42.

- 小林隆児, 鯨岡 峻 (編著) (2005). 自閉症の関  
係発達臨床. 東京, 日本評論社.
- 鯨岡 峻 (1997). 原初的コミュニケーションの諸  
相. 京都, ミネルヴァ書房.
- 鯨岡 峻 (2005a). 「発達性障害」の意味するもの.  
小林隆児, 鯨岡 峻 (編著). 自閉症の関  
係発達臨床, pp. 37-39, 東京, 日本評論社.
- 鯨岡 峻 (2005b). 発達障害の概念とその支援の  
あり方を考える. 教育と医学, 53, 1128-1136.
- Lebovici, S. (1983). Le nourrisson, la mere et le  
psychoanalyste: Les interactions precoces.  
Paris, Le Centurion.
- Mundy, P. & Sigman, M. (1989). The theoretical  
implication of joint-attention deficits in  
autism. Development and Psychopathology, 1,  
173-183.
- 小澤 勲 (1984). 自閉症とは何か. 精神医療委員  
会. (復刻版が 2007 年に洋泉社から発刊されて  
いる)
- Premack, D. & Woodruff, G. (1978). Does the  
chimpanzee have a theory of mind? Behavioral  
and Brain Sciences, 1, 515-526.
- Richer, J. M. (1993). Avoidance behavior, at-  
tachment and motivational conflict. Early  
Child Development and Care, 96, 7-18.
- Rutter, M., Bartak, L. & Newman, S. (1971)  
Autism: A central disorder of cognition and  
language. Rutter, M. (ed.), Infantile Autism:  
Concepts, Characteristics and Treatment, pp.  
148-171. Edinburgh, Churchill-Livingstone.
- 滝川一廣 (2001). 自閉症はどう研究されてきたか  
— 新しい自閉症観に向けて —. 児童青年精神  
医学とその近接領域, 42, 178-184.

#### 執筆者紹介



略歴：1975年：九州大学医学部卒業

現在：大正大学人間学部臨床心理学科教授 医学博士

関心：従来の精神発達とその精神病理を関係発達臨床的視点を通して捉え直すこと。

所属学会：日本精神神経学会, 日本児童青年精神医学会, 日本乳幼児医学・心理学  
会, 日本心理臨床学会, 日本小児精神神経学会, FOUR WINDS 乳幼児精  
神保健学会, 日本精神分析学会, 日本トラウマティックストレス学会, 日  
本思春期青年期精神医学会, 日本精神病理・精神療法学会, 日本発達障害  
学会, World Association of Infant Mental Health